

# 環境学習施設の つくり方

—地域に多面的価値を創出する施設—

「環境学習施設ハンドブック」制作に向けた1年間のまとめ

【特別寄稿】

大阪産業大学 デザイン工学部環境理工学科 准教授

花嶋温子



## 環境学習施設ハンドブック

自治体が設置するごみの焼却工場やリサイクルプラザなどに、来場者向けの環境学習設備が設けられるようになって久しく経ちます。それぞれの自治体によって独自に設置されているこれらの学習施設をネットワークし、より元気にして、持続可

能なライフスタイルへの変化を応援するために、私達、廃棄物資源循環学会環境学習施設研究部会は活動しています。

その活動の一つが、施設の計画や運営の全体が見通せるような「環境学習施設ハンドブック」の制作です。その準備のため、この『月刊廃棄物』に、昨年1月から約1年間にわたり「環境学習施設のつくり方」と題して各地の環境学習施設について事例紹介をしてきました。今回は、その中間まとめとともに、今後の展開について考えます。

### 六つの事例紹介

表1に示すように、これまで六つの施設を事例として紹介してきました。環境学習施設のさまざまなあり方を紹介するために、なるべく異なった特徴を持つ事例を取り上げました。

一つ目は、2022年3月号で紹介した国崎クリーンセンター啓発施設「ゆめほたる」です。ここでは、まず、どのような施設を作るかの検討が地域住民によって十分に行われたため、指定管理者に任せ

となる人材を確保しました。それによって、公共交通機関の何も無い山の中に、年間3万5000人が来場するような、イノベーションセンターが出来上がったのです。

二つ目は、5月号で紹介した豊田市環境学習施設eco-T「エコット」です。ここでも市民によって運営に関する十分な検討が行われ、「地域の市民が作る市民のための環境学習施設」というポリシーが形成されました。ここでは、インタプリターという市民ボランティアが多数活躍しています。それも、同じ人がずっと担うのではなく、次々に新たな人材を養成し、期間を定めて卒業していく仕組みが完成しています。

表1 ハンドブックのためのこれまでの事例紹介

月刊廃棄物掲載号	ビジョン=地域にとっての施設の位置づけ・基本的考え方
2022年1月号 「総論」	「環境学習施設ハンドブック」制作開始
2022年3月号 国崎クリーンセンター啓発施設「ゆめほたる」	地域のイノベーションセンターをめざす
2022年5月号 豊田市環境学習施設eco-T「エコット」	市民がつくる市民のための環境学習施設
2022年7月号 今治市クリーンセンター「バリクリーン」	地域を守り市民に親しまれる施設に
2022年9月号 四日市市クリーンセンター	「ごみを出さない〜リデュース」を伝える
2022年11月号 浜松市西部清掃工場環境啓発施設「えこはま」	市民目線の運営がキラリ
2023年1月号 みやま市バイオマスセンター「ルフラン」	小学校の跡地にできた地域のにぎわい施設

最初に運営を担っていたのは、愛知県内で長い実績のあるNPO法人中部リサイクル運動市民の会でした。その後、地元の市民を中心に施設運営のためのNPO法人とよたエコ人プロジェクトが設立され、現在の運営は、この地元のNPO法人が、市から単年度契約で受託しています。

三つ目は、7月号で紹介した今治市クリンセンター「バリクリン」です。施設整備の検討段階から「21世紀のごみ処理施設のモデルになる」ことを目指して、地域を守り市民に親しまれる「今治モデル」を打ち立てました。バリクリンのごみを処理し、環境情報発信の拠点となり、そして災害時の避難所にもなるのです。地元の経験豊富なNPOと連携して災害時にいかに避難所を運営するか綿密な計画が立てられ、避難所開設訓練も毎年実施しています。2018年には台風で、近隣の住民の方が避難してこられた実績もあります。また、市民に親しまれる施設を目指して開催された「いまばり環境フェスティバル」では、ごみを受け入れるプラットホームをメイン会場にして、ステージやフリーマーケットなどが設営されました。思い切った施設の開放により、市民はご

み処理施設をより身近に感じられたようです。小学生の見学や、スポーツも行える大研修室の貸し出し、各種イベントなどで年間2万人がここを訪れています。

四つ目は、9月号で紹介した四日市市クリンセンターです。ここは、プロジェクトンマップングなどの最新の展示技術によって、特に子どもたちに対して、ごみを出さない(リデュース)を伝えることを目指しました。建設段階での市役所の熱い思いが、デザインや照明など細部にわたって形になっています。見学はストーリー仕立てになっていて、ゴミリアンが地球を侵略してくるのを、見学にきた子どもたちが「いっしょに考え」「手を動かし」「声を出し」て撃退するのです。溶融炉の出湯を見る場所は、通常は入れない炉室内に入り込んだような雰囲気をあえて出し、臨場感を高めています。見学のクライマックスは、蒸気タービン発電機へのプロジェクトンマップングで、子どもたちは声を揃えてゴミリアンと戦い、勝つのです。四日市市役所の熱い思いをぜひ一度見に行ってください。

五つ目は、11月に紹介した浜松市西武清掃工場環境啓発施設「えこは

ま」です。こちらは、もともと、市内でごみ減量の活動をしていた団体が、環境啓発施設運営のためにNPO法人となって、清掃工場運営会社から委託を受ける形で、啓発施設の運営をしています。市民目線での「もったいない」から始まり、地域の企業や市民をつないで新たな循環の流れをつくるのが得意です。循環の流れは、一人ひとりの小さな気付きから始まることもあります。

六つ目は、2023年の1月に紹介した、みやま市バイオマスセンター「ルフラン」です。これまでの事例は、大規模なごみの焼却施設に付設された環境学習施設でした。しかし、こちらは生ごみと尿をバイオガス化する施設で、それも小学校の跡地にプラントを設置し、元の校舎をさまざまな地域活動用に再利用したという事例です。人口が減っていく地域に、少ない費用でより充実した豊かな暮らしをつくることを実現しています。

### 紹介した事例の特長をマップに

これらの事例の特長を、2019年に作った「環境学習施設のあるべき姿を探るマップ」(図2)に書き込

んでみたのが図1です。さまざまな部分に特長を持つ施設があることが分かります。もちろん、これらの施設は他の部分にも特長があるので、この図は特に目立つ特長を拾い上げてみた結果です。

### 紹介した施設に共通なこと

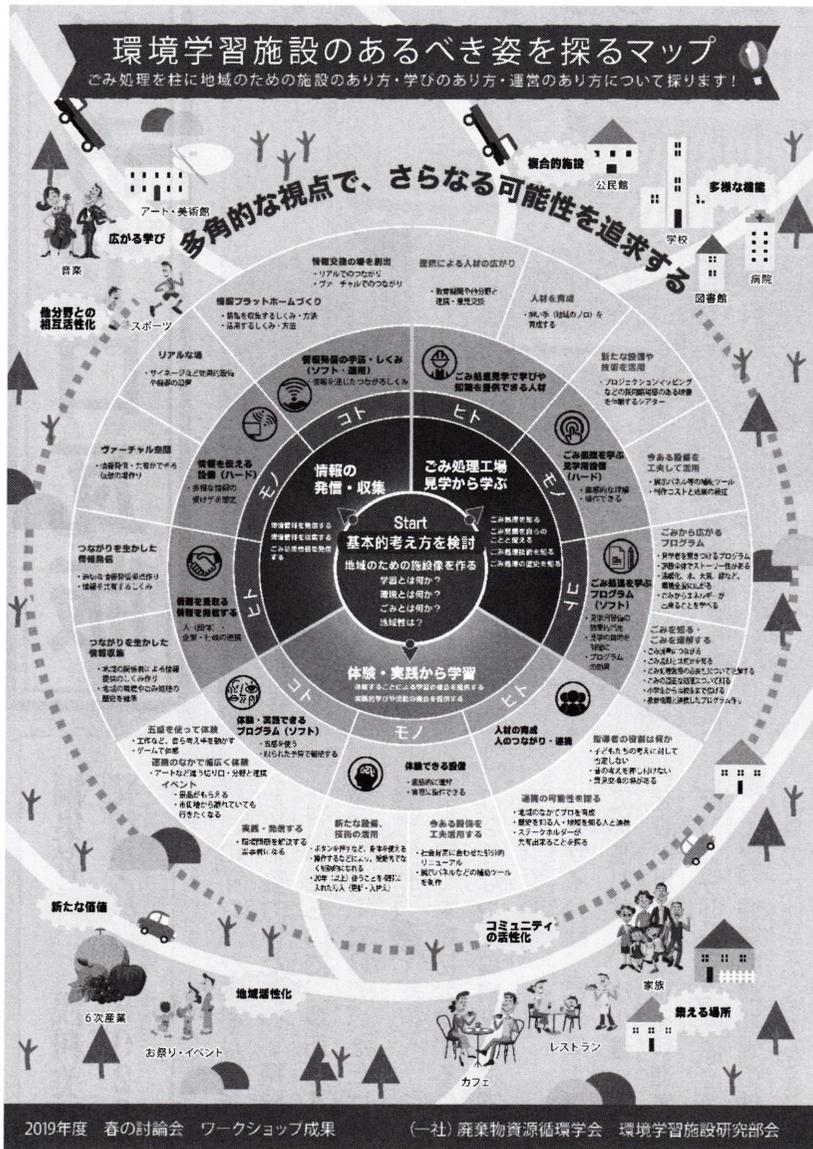
紹介した施設は、前述の通りそれぞれユニークですが、共通しているのは、何をしたいのか、伝えたいのが関係者によって十分に考えられていることです。行政が音頭を取って市民による計画書を作った事例もあれば、NPOがコーディネーターとなり市民の意見をまとめた例もあり、また、市役所の担当者たちが熱い思いをメーカーと紡ぎあった例もあります。活発な活動をしている施設には、その地域においてどんな施設が必要か、施設の目指すべき方向を話し合った経過があります。

図1の中心にある「基本的考え方を検討」とあるところがやはり重要なようです。

### 施設の運営者による違い

近年、環境学習施設の運営方式に





機能を持つようになってきました。今回の事例でも、観光、災害時の拠点機能、産業活性化、児童福祉、高齢者福祉の要素を兼ね備えている施設が見られます。

これらを総合して評価するにはどうしたらよいのかについても検討が

必要です。

これからのとりまとめの方針

今後も、ハンドブックに載せるための特長のある施設の事例収集は続けます。

と同時に、図1の中心から一つ外側にある三つの機能について、機能ごとに、複数の特長のある施設の事例をまとめる作業にも取り掛かります。例えば、「ごみ処理施設の見学」について、どのような工夫をしている事例があるのか。「体験・実践か

ら学ぶ」方式について、どのような事例があるのか。「情報の発信や収集」については、どのような事例があるのか。機能に分解することによって、ごみ処理施設に付設されていない環境学習施設からも多くの役立つ情報が得られることと思います。

つづき

連載を始めた当初より、この連載を通じて、いっしょに「ハンドブック」づくりを楽しんでいた各々種施設の方々、行政のご担当の方々、市民活動団体の方々、関連企業の方々、研究者の方々からのご連絡をお待ち致しております。詳しくは、「廃棄物資源循環学会環境学習施設研究部会」で検索してください。

●連絡先●  
**環境学習施設研究部会**  
 「環境学習施設研究部会」で検索すると、(一社) 廃棄物資源循環学会環境学習施設研究部会のページがでています。同部会がfacebookの「環境学習施設を考える会」も運営しています。